

平城京の小規模宅地と辛櫃を再利用した井戸

平城京左京五条四坊十六坪（奈良市大森町）

平城京には、貴族から奴婢まで様々な人々が10万人前後住んでいました。これらの人々には身分に応じた広さの宅地が支給され、位が高いほど広大な宅地に住んでいました。

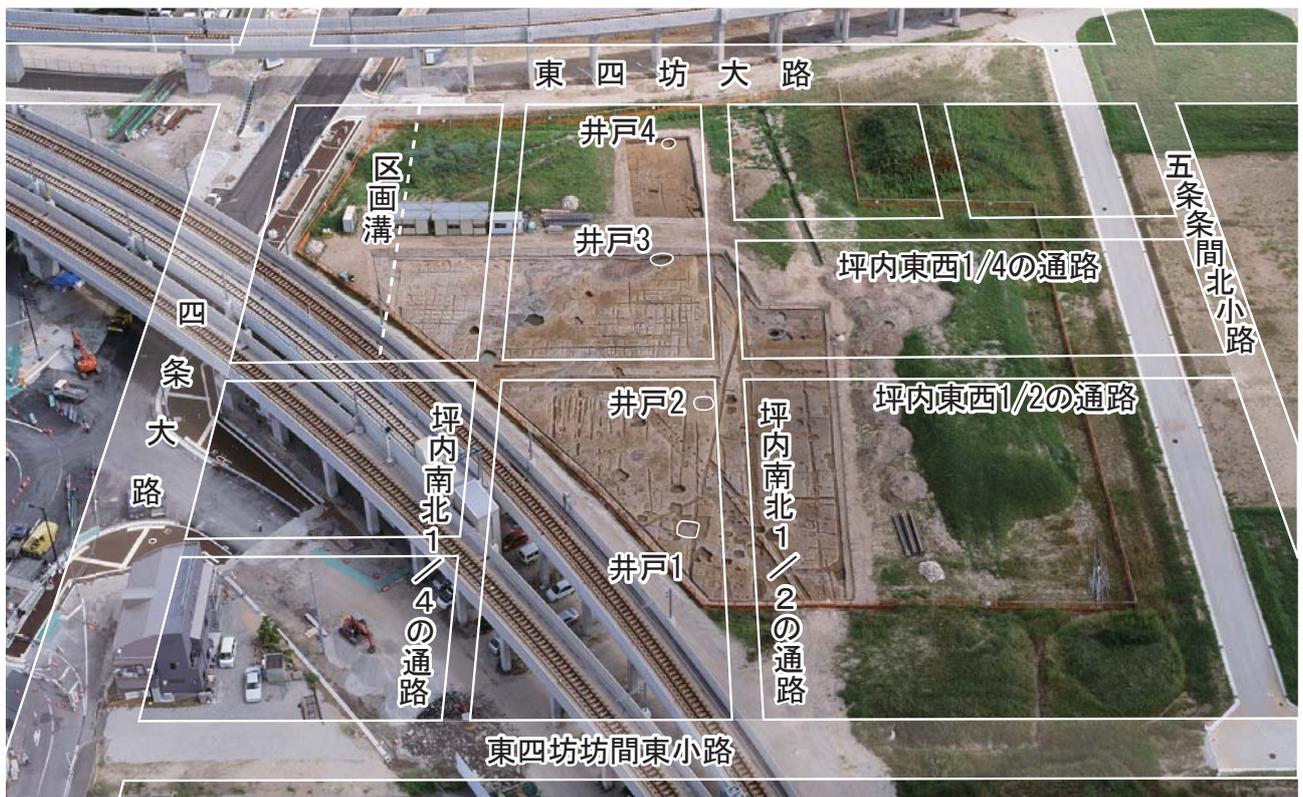
この宅地支給の基本となるのが、東西南北を道路で囲まれた一辺約130m四方の「坪」と呼ばれる単位です。この坪を合併・分割することによって大小の宅地を作っていきます。平城京左京五条四坊十六坪の発掘調査で、小規模の宅地の様相が明らかになりましたのでそれを紹介しましょう。

十六坪内では、幅1.3～2.0mの東西南北方向にはしる通路が見つかりました。通路は敷地内の東西南北の1/2または1/4の位置にあり、坪内を16等分しています。また坪内では、約200棟の掘立柱建物・塀、20基の井戸が見つかりました。これらの遺構配置から、坪内を3/8・1/4・1/8・3/16・1/16・1/24・1/32に時期を違えて分割し、宅地利用していたことがわかりました。宅地の面



調査地位置図 (1/ 15,000)

積は、最大で約4,800㎡、最小でも約450㎡あります。1/16以下の宅地では数棟の小規模な建物が、3/16以上の宅地ではそれよりもやや規模の大きな建物が建てられ、宅地規模と建物規模に相関関係が見られます。また井戸は、これら宅地内の南東隅に分布する傾向があります。このように十六坪は、内部の区画を分割・合併しながら、大小の宅地を構成することが特徴と言えます。



分割利用された平城京左京五条四坊十六坪(西から)

^{からびつ}
辛櫃を再利用した井戸 十六坪西側の1/8に分割された宅地で見つかった井戸1は、井戸枠の一部に辛櫃と呼ばれる箱形容器を転用していました。井戸の構造は、下段に直径0.66m、高さ0.5mの曲物を据え、その上に長辺1.05m、短辺0.7m、高さ0.39mの、底板と蓋を取り外した辛櫃を積んでいます。最上段には、一辺約1.3mの^{ほうけいよこいたぐみせいろがた}方形横板組井籠型と呼ばれる構造の枠が3段以上組まれていました。この井戸からは、8世紀後半～末頃の土器が出土しています。

辛櫃の短辺下端中央（井戸枠東面の下端）に、縦2cm、横6cmの長方形の穴を開けているのは、井戸枠内への導水のためと考えられます。外した底板は、各辺の大きさに合わせて切断して櫃の上に積み、その高さを増すために使われています。

辛櫃とは？ ところで、辛櫃とは一体どのようなものでしょうか。一般的に櫃とは、蓋を被せた箱形容器のことを言い、形態によって辛櫃と^{かぶ}倭櫃の2種類に区別することができます。辛櫃は身の長辺側に2本ずつ、計4本の脚を縦方向に取り付けたもの、倭櫃は長辺側に横棧を1本ずつ取り付けたものを言います。井戸1の櫃には、長辺側に脚を取り付けるための金具痕跡が2ヶ所残

ることから、四脚形式の辛櫃であることが判明しました。身の四隅の組み方は、板の高さを8分割し、交互に切り欠いて組み合わせる「八枚組接ぎ」^{くみつ}で、鋸で打ちつけて固定しています。十六坪の周辺で出土している銅製の飾鋸は、このような櫃に使われていたものかもしれません。接合部には「^{かげさい}蔭切」と呼ばれる技法で黒漆を施しており、湿気除けや装飾的な意味を持ちます。

伝世品の櫃は、正倉院宝物などで数多く確認されていますが、出土例としては非常に珍しく、今回出土した辛櫃を含めても全国で15例しかありません。そのうち、井戸1と同様の辛櫃は平城京右京二条三坊四坪と京都府向日市長岡京跡の2例だけです。今回見つかった辛櫃は、出土土器から遅くとも8世紀後半以前の製作と推察でき、最も古い出土例であることがわかります。

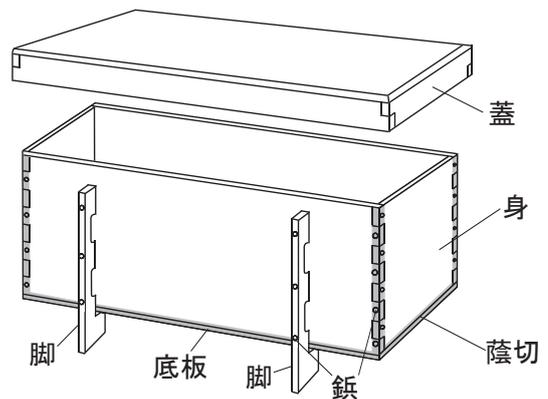
文献資料によると、辛櫃の中には、紙・経巻・衣類などを納めていたことがわかります。今で言う家具にあたります。それが何らかの理由によって使用されなくなり、井戸枠として再利用したものと考えられます。物を廃棄せずリサイクルして有効に使うという、当時の生活の一端がうかがえる資料です。



辛櫃を再利用した井戸1（南から）



井戸枠に再利用された辛櫃



辛櫃の復原模式図